

■ 今年度の神経内分泌学会

理事長 須田俊宏 (弘前大学 大学院 医学研究科 内分泌代謝内科学)

今年の神経内分泌学会の行事はなかなか多彩です。まず8月にINFによる若手神経内分泌学研究者育成プログラムとして、第2回School of Neuroendocrinologyが湯布院で産業医大の上田先生のお世話により開催されます。これはその前に京都で行われる国際生理学会と連動されて行われます。日本からもたくさんの若手研究者が参加し、他国の研究者との交わりを深められることを期待します。つぎに9月には第36回日本神経内分泌学会学術総会が北九州市で名古屋大学の磯会長のもとで開催されます。この学術総会も引き続き行われる第8回国際下垂体後葉ホルモン会議(上田会長)と連動して行われます。いずれの会も盛会になることを期待しています。

一方昨年11月にINF Council MeetingがワシントンDCで行われ、出席してきました。そこでは来年ルーアンで行われるICN2010のプログラムの大枠が示されました。それによると会期は7月11日から15日にかけての5日間、中日の13日午後はエクスカージョンと、ゆったりとした時間の配分となっています。ワインタimeも設けられています。いかにフランスらしい運営となっています。ここで開催されるCouncil MeetingでICN2014の立候補国によるプレゼンテーション後に投票が行われ、ICN2014開催国が決定されます。私たちの次の世代の人達のためにも招致を成功させたいと願っています。

また4月に行われた理事会で川上賞1人、若手研究助成金受賞者2人が決定されました。これに関しましては、応募者をもっと増やす努力をすること、応募者の本学会への貢献度を明らかにする方策を考えることなどが委員会から

報告され、同意が得られました。各受賞者は、今までのみならず、今後も本学会への貢献が期待されていますので、毎回学会発表し、本人の発展のみならず、会員のモチベーションへの刺激をお願いしたいと考えています。

さらに2011年度に日本神経内分泌学会、比較内分泌学会、内分泌病理学会、生殖内分泌学会の4学会が、同時期に同じ場所で開催される「内分泌学ウィーク2011」の準備状況が報告され、2011年秋に東京都内で開催予定というところまでこぎつけました。このような企画は本学会のみならず、内分泌学会全体にとってもメリットが大きい試みであると確信しています。できれば下垂体研究会も何らかの形で是非参加していただきたいと念願しています。

今は研究面で内分泌学以外の分野も中枢のコントロールという問題に直面し、研究の焦点が視床下部に当てられています。本学会員はこの分野のプロとして詰めの甘い部分を補強し、新たな問題点を明らかにしていく義務があると思っています。一方臨床面では、厚労省の間脳下垂体機能障害調査研究班に対応できる学会としての明確な位置づけが必要ではないかと思っています。本学会でも間脳下垂体疾患の病態生理の研究などを通して診療指針等を検討し、班会議との連携を保っていければ本学会の基盤はさらに強固なものになるものと感じています。



■ 大藤眞先生を追悼して

橋本浩三（特定医療法人仁生会 細木病院）

去る4月2日、元岡山大学学長大藤眞先生がご逝去されました。享年90歳でした。4月29日に開催された「お別れの会」では、当学会名誉会員の井村裕夫先生が追悼の辞を述べられました。

大藤先生は、第二次大戦後まもなく独自の方法で下垂体門脈について詳細に検討され、下垂体門脈を正確に把握され報告された功績により、平成17年の本学会で第1回の特別功労賞を授賞されています。下垂体門脈は1930年にポパらにより最初に発見され血流が上向きであると報告されましたが、その後血流が下向きというウィスロッキーらの説も登場し混乱していました。ハリスらは1944年から1952年頃に行った実験で門脈系が脳と下垂体を結ぶリンクであるという説を唱えましたが、なお異論があり、この説が認知されるまでにはさらに数年を要しています。このような頃、4年間に亘って中・南支を軍医として転戦されていた大藤先生は、1946年9月に岡山医科大学第二内科へ助手として帰局されています。外国からの学問的情報がほとんど入手できなかったこの時期に、先生はマウスを用い血管二重色素注入後、スパルテホルツ式透明標本及び各種連続切片を製作し、門脈の微細構造や動・静脈との関係を、透明標本を種々の角度より立体的に詳細に観察されました。そしてこの血管系が、動・静脈とは異なる門脈と呼ばれるにふさわしい系である根拠を明確に示され、血流が漏斗部から下垂体前葉へ下行性であり、門脈系が漏斗部から前葉に向かう特殊な輸送路であると論文で提唱されています。またポパやウィスロッキーらの誤謬を明確に指摘されています。この論文（岡山医学学会雑誌61: 207-217, 1949）は下垂体

門脈系を最も正確に観察し定義した点で特筆すべきすばらしいものでしたが、戦後まもなくであり和文で書かれていたため、国際的に十分認知されるに至らなかったことは大変残念なことでした。

大藤先生はその後第二内科教室の主な研究分野であった結核や血液学の研究に従事された後、昭和42年（1967年）12月に岡山大学第三内科の初代教授に就任され、臨床免疫学、内分泌代謝学、腎臓病学を教室の三本柱として教室員の指導に当たられ、教室の発展に貢献されました。私は昭和43年に大藤先生の第一期生として入局し、医師としての初期研修を受けました。先生から患者さんに対する真摯な診療と考える診療を学ぶことができました。また、先生は学生の教育にも大変熱意を持って当たられており、教育者としての姿勢を学ぶことができました。先生は教授として内分泌代謝学のみならず臨床免疫学、腎臓病学の研究にも大変興味を持たれ、教室員を幅広く指導されました。研究や臨床では、我々に「近い目と遠い目」を常に持ち、近い目標には邁進しながらも必ず遠い目標も常に頭に置いておく必要があることを教育されました。当時神経内分泌学は内分泌グループの若いチーフである高原二郎先生（後に香川医科大学副学長）に受け継がれており、私ども若手医師6-7人が内分泌学の研究と臨床の指導を受けました。その結果私も視床下部ホルモンに興味を持ち、昨年大学を退任するまで40年近くに亘りCRHを中心にした神経内分泌学に興味を持ち続けることができました。

大藤先生は昭和51年に日本臨床免疫学会会長と日本内分泌学会西部会長、昭和53年に日本腎臓学会会長、昭和55年に日



お別れの会で追悼の辞を述べられる井村裕夫先生



第32回日本神経内分泌学会（沖縄）時の大藤先生ご夫妻

本結合組織学会長、昭和56年に日本内分泌学会長、昭和57年に日本リウマチ学会長と日本アレルギー学会長と次々に関連学会長を務められ、まとめ役としての能力を発揮され、これらの学会の発展に貢献されました。当神経内分泌学会の会長は後になって先生の弟子である高原先生と私が務めることになりました。先生はさらに昭和56年以降岡山大学長、吉備国際大学長、順正短期大学長にも就任され、生涯大学という場で学問と教育の発展に貢献されました。学会にも良く出席されていましたが、平成17年の沖縄での本学会で特別功労賞を受賞された時にお会いしたのが、学会で先生にお会いした最後となりました。その頃から少しずつ

体調を崩されておられたようでした。私ども昭和42年卒業の第一期生は「42会」と称して毎年1回夫婦で集まり、大藤先生ご夫妻を囲んで楽しいときを持つことを楽しみにしておりましたが、それも1昨年が最後となってしまいました。

先生は研究者、臨床家、教育者として、若い研究者や医師、学生に大きな影響を残された素晴らしい生涯を送られました。多くの学会や教育界に残されたご業績とご薫陶に心より敬意と感謝の念を表するとともに、心よりご冥福をお祈り申し上げます。

■ 第36回日本神経内分泌学会学術集会開催にあたって

大 磯 ユタカ（名古屋大学 大学院 医学系研究科 糖尿病・内分泌内科学）

このたび第36回日本神経内分泌学会学術集会を開催するにあたり、学会長として開催のご案内をさせていただきます。

日本神経内分泌学会は日本内分泌学会の分科会として発足して以来、今回で36回目の開催を迎える伝統ある学会であり、神経内分泌分野の基礎・臨床両面から最新の研究成果をUpdateに発表する機会としてその役割を果たしてきました。

今回の学術集会は2009年9月4日(金)～5日(土)の2日間、北九州国際会議場（北九州市）で開催させていただきます。会長校は名古屋大学ですが北九州市で開催する理由は、本学会とジョイントし第8回国際下垂体後葉ホルモン学会（産業医科大学：上田陽一会長；9月4日～8日）との合同開催となるため、プログラムの一部も共催するなどこれまでにない国際的雰囲気漂う学会となるものと期待しています。

神経内分泌学の研究は時代とともに間脳・下垂体系ホルモンの領域から大きく展開し、最近では視床下部・下垂体系が末梢臓器とのクロストークを活発に維持しながら複雑な生体制御機構を形成していることを明らかにする時代に入ってきました。多くの研究者、臨床医の皆さんの参加を得て今回の学術集会が何らかの形で新規の制御メカニズムあるいは新しい病態の解明を発信する場となることを願っております。

教育講演にはUniversity of PennsylvaniaのKendra Bence博士に中枢性エネルギーバランス調節機構の最新の研究成果をお話し頂き、シンポジウムとしては「リンパ球性下垂



体炎：新しい疾患概念の提唱と診断へのアプローチ」と、「摂食制御機構の新たな解明」を企画し、基礎的ならびに臨床的視点から熱いディスカッションを展開して頂く予定です。

さらに一般口演、ポスター発表の他、若手研究奨励賞の選考講演、川上賞授賞講演、ランチョンセミナーなど盛りだくさんのプログラムを用意しております。

夏休み明けの忙しい時期ではありますが、意義のある学術集会にするよう全力をあげ準備を進めますので、多くの皆様のご参加をお待ちしております。

：平成21年9月4日（金）～5日（土）

：北九州国際会議場

（北九州市小倉北区浅野3-9-30）

学術集会ホームページ

： <http://www.med.nagoya-u.ac.jp/endodm/gakkai/>

：演題登録はホームページ上で行いますので、前記ホームページにアクセスして下さい。

登録期間は6月1日から7月15日までです。

参加費：参加費は当日、会場でお支払い下さい。

一般会員 ¥8,000-

大学院生 ¥4,000-

学部学生 無料

*大学院生および学部学生の方は当日受付にて学生証を必ずご提示ください。

：学部学生、大学院生が筆頭者で発表す

る場合にはトラベルグラントを支給します。ご希望の方は演題登録時にWebの該当欄にチェックをお願いします。

：有馬 寛

名古屋大学大学院医学系研究科糖尿病・内分泌内科学

〒466-8550 名古屋市昭和区鶴舞町65

TEL：052-744-2142

FAX：052-744-2212

E-mail：jns36th@med.nagoya-u.ac.jp

■ 第8回国際下垂体後葉ホルモン会議

上 田 陽 一（産業医科大学医学部第一生理学）

第8回国際下垂体後葉ホルモン会議（VIIIth World Congress on Neurohypophysial Hormones）が2009年9月4日（金）～8日（火）の期間、北九州国際会議場（北九州市JR小倉駅そば）で開催されます。今回は第36回日本神経内分泌学会（2009年9月4日（金）～5日（土））との共同開催となります。本会議が日本神経内分泌学会と合同学術集会を開催するのは初めてのこととなります。

本会議は1995年に当時自治医科大学の斎藤寿一教授が、それまでに開催されていたThe International Conference on NeurohypophysisとThe International Vasopressin Conferenceの両会議を統合されて第1回を栃木県那須において開催されたことに始まります。その後2年毎に開催され、日本での開催は2003年京都（京都府立医科大学・河田光博教授主催）以来になります。

本会議では毎回、基礎・臨床の両方の観点から下垂体後葉ホルモン研究の最前線で活躍される研究者の方々をお招きして、ご講演頂いております。今回のテーマは「Vasopressin & Oxytocin: Focus in the Post-Genomic Era（バゾプレッシン&オキシトシン:ポストゲノム時代に向けて）」と致しました。ポストゲノム時代と言われて久しい昨今、日進月歩で技術が進歩する中、下垂体後葉ホルモン研究のあり方を再確認し、発展させる機会になれば幸甚です。今回は5つのPlenary Lecture（うち1つは日本神経内分泌学会と共催）と8つのSymposium、Special SessionとしてGlenn I. Hatton Memorial Symposium等を企画しております。いずれの講演も大変魅力ある最新の内容の発表が

期待されます。また、Poster Sessionも2日に渡り開催予定です。特に1日目は日本神経内分泌学会と共催ということもあり、両学会間での活発な討論と交流がなされることを期待しております。

学術集会の最も重要な目的の1つは若手研究者の育成です。このような会合で国内外の様々な研究にふれ、議論することは大変有意義な事であると考えられます。是非とも多くの若手研究者に奮って参加して頂きたいと希望しております。

バゾプレッシン及びオキシトシンのみならず水・電解質に関わる基礎・臨床研究に携わるの方々のご参加をお待ちしております。

第8回国際下垂体後葉ホルモン会議会長

上田 陽一 産業医科大学医学部第一生理学

大磯ユタカ 名古屋大学大学院医学系研究科糖尿病・内分泌内科学

開催日時：平成21年9月4日（金）～8日（火）

開催場所：北九州国際会議場

（北九州市小倉北区浅野三丁目9番30号）

合同学術集会ホームページ：<http://www.wcnh2009.jp/>

参加募集：学術集会に参加される方はホームページから参加登録フォーム（Registration & Accommodation）をクリックし、指示に従ってください。

参加登録：登録期間は2009年8月20日（木）までです。

8月21日以降のお申込みは当日会場にて受け付けます。（お

支払は日本円で現金のみ)
一般参加…国際下垂体後葉ホルモン会議のみ ¥30,000-
…日本神経内分泌学会+国際下垂体後葉ホルモン
会議 ¥32,000-
学生参加…国際下垂体後葉ホルモン会議のみ ¥15,000-
…日本神経内分泌学会+国際下垂体後葉ホルモン
会議 ¥16,000-
参加費の事前支払いにご協力くださいますようよろしくお
願いいたします。
演題募集：平成21年6月1日（月）締め切り

ポスター演題登録につきましてはホームページの
「Abstract」から登録ファイルをダウンロードし、Word書
類の形式でご記入の上、メールに添付し事務局までお送り
下さい。

合同学術集会事務局：産業医科大学医学部第1生理学
〒807-8555 北九州市八幡西区医生ヶ丘1-1
TEL：093-691-7420 FAX：093-692-1711
E-mail：wcnh2009@mbox.med.uoeh-u.ac.jp

■ 下垂体後葉（臨床・基礎）トピックス 紹介 ■

● 家族性中枢性尿崩症の発症機序の解析

有馬 寛（名古屋大学医学部糖尿病・内分泌内科学） ●

家族性中枢性尿崩症（FNDI）は常染色体優性遺伝の疾患で、生後数ヶ月から数年で緩徐進行性に口渇、多飲、多尿などの尿崩症の症状を呈し、最大では1日10Lから15Lにも及ぶ多尿を認める。これまでに60以上の点突然変異が報告されているが、その多くは抗利尿ホルモンであるバソプレシン（AVP）領域よりそのキャリアプロテインであるニューロフィジン（NP）領域に認められ、異常NPの蓄積により尿崩症が発症すると考えられている。しかしながら正常な一つのalleleを持ちながら進行性に尿崩症を発症する病態は未だ十分解明されていない。また同じ遺伝子変異でも発症時期は症例により異なることから、遺伝因子以外の要因が発症に影響を与える可能性も考えられる。

現在私たちの教室ではNP領域にナンセンス変異を導入したFNDIノックインマウスを用いてFNDIの発症機序の解析を行なっている。本マウスは生後経時的に多尿が進行することからFNDIの発症機序を解明するために適したモデル動物である。FNDIノックインマウスにおいては視床下部AVPニューロン特異的に封入体が存在し、封入体の数およびサイズは多尿の進行に伴い経時的に増大する。またこの封入体は周囲にリボソームを持つ粗面小胞体内に存在し、異常NP、正常NP、AVPのいずれの抗体にても染色さ

れないがDDAVPを持続投与したマウスではそのサイズが小さくなることから、（異常）AVP前駆体に由来する蛋白と想像される。さらに多尿の進行は細胞死が原因ではなくAVPニューロンの機能障害の進展に起因することも明らかとなった。

このFNDIノックインマウスに塩分負荷食を投与すると封入体のサイズが増加し、多尿の進行も加速される。こうした表現型の進行は間歇的に脱水刺激を加えたFNDIノックインマウスにも認められることから、AVPの分泌刺激が（異常）AVP前駆体に由来する封入体の形成、さらには細胞機能障害を促すことで多尿の進行をもたらすと解釈できる。このように環境因子が遺伝子性疾患であるFNDIの発症及び進展に影響を及ぼすことが示された。



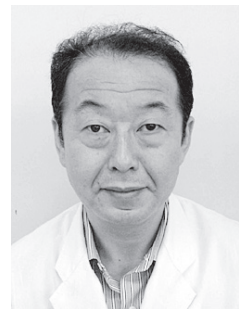
● リンパ球性漏斗下垂体後葉炎の病因自己抗原の同定、及び診断マーカーの開発に向けての検討

梶 村 益 久 (名古屋大学 大学院 医学系研究科 糖尿病・内分泌内科学) ●

リンパ球性漏斗下垂体後葉炎 (LINH) は中枢性尿崩症に特有な症候を呈する疾患である。LINHの確定診断には下垂体後葉または下垂体茎生検が必要であるが侵襲的であるため実践が困難であり、MRI検査でもたとえば胚細胞腫や下垂体腺腫などの腫瘍や肉芽腫疾患との鑑別が困難なこともあるため誤診も多く、生検を必要としない非侵襲的な診断マーカーの確立が望まれている。またLINHの病因、機序も解明されていない。このような背景のもと我々はLINHにおける病因下垂体自己抗原の同定、及び血清を用いた診断マーカーの開発に向けた研究を行っている。我々は名古屋大学医学部倫理委員会の承認を得てLINHまたはLINH疑い患者、視床下部下垂体腫瘍、及びLINHに合併することが多い自己免疫性疾患患者等の血清を収集しているが、LINHは患者数が少ないため他の病院と共同で収集を実施している。そして我々は収集した検体の品質を管理し、その検体を用いてプロテオーム解析を施行している。

従来、特発性中枢性尿崩症患者で抗AVP抗体が比較的高頻度で出現し、また無症候性であっても抗AVP抗体陽性症例ではその経過中に尿崩症を発症する症例も報告されていた。さらに抗AVP抗体陽性とMRI所見での下垂体茎肥厚との有意な相関が報告され、逆に臨床上LINHと考えられる症例で抗AVP抗体が認められることが報告された。以上より特発性中枢性尿崩症の中に自己免疫疾患としての尿崩

症が存在し、またその抗AVP陽性自己免疫性尿崩症とLINHとでは類似した病態が存在する可能性が考えられ、LINHにも抗AVP抗体の関与が示唆されていた。しかし最近Maghnieらは若年の中枢性尿崩症患者の中で、特発性尿崩症症例12人のうち9例 (75%)、ランゲルハンス細胞組織球増加症6人のうち4例 (67%)、胚細胞腫2人のうち2例 (100%)で抗AVP抗体が認められたと報告し、抗AVP抗体は特発性尿崩症、及びLINHの信頼できる診断マーカーではないと考えられた。



一方リンパ球性下垂体前葉炎を含むリンパ球性下垂体炎 (AH) では7種のAH自己抗原の候補が報告されている。しかしどの自己抗原もAH特異的ではなく、病因性も示されていない。以上より我々の研究によってLINHの診断マーカーの開発のみならず、LINHの病因下垂体自己抗原が同定されることによって、その自己抗原特異的抗体を用いたイムノアッセイや動物へのLINHの導入などが検討され、その結果LINHとともにAHの病因、機序の解明にも貢献できることを期待している。

● 下垂体後葉ホルモンとGFP

藤 原 広 明 (産業医科大学医学部第1生理学) ●

下垂体後葉ホルモンは視床下部の室傍核および視索上核で産生され、下垂体後葉に貯えられ、血液中へ放出されます。後葉ホルモンにはバゾプレッシンとオキシトシンがあります。バゾプレッシンは抗利尿ホルモン (ADH) とも呼ばれ、腎臓に作用し、水の再吸収を促進します。また、バゾプレッシンはストレス応答ホルモンとしても知られており、視床下部-下垂体-副腎軸の活性化 (血中グルココルチコイドの分泌) 作用も有しています。オキシトシンは分娩時の子宮収縮作用および乳汁射出作用があります。最近では、オキシトシンが子育て、愛情行動、ヒトとヒト

の信頼感の形成を促進する作用を持っているという報告¹⁾²⁾がなされ、注目を浴びています。

GFP (オワンクラゲから同定された緑色蛍光タンパク、Green Fluorescent Protein) の発見により、下村修博士が昨年のノーベル化学賞を受賞したことは記憶に新しいかと思います。現在、GFPは生命科学の分野で汎用されていますが、下垂体後葉ホルモン研究においても大変有用となっています。これまでに、アメリカNIH



のYoung W.S., 3rdらの研究室ではオキシトシンニューロンにGFPが発現するトランスジェニックマウスを開発しました³⁾⁴⁾。私達の研究室では、バゾプレッシン遺伝子にGFP遺伝子を組み込んだトランスジェニックラットを作出しました⁵⁾⁶⁾⁷⁾⁸⁾。これらのマウスやラットではオキシトシンまたはバゾプレッシンの産生細胞、運搬経路そして下垂体後葉がGFPで可視化されます。今後、今までは不可能だった細胞を同定した上でのパッチクランプ法などが可能となり、様々な研究に応用できると考えています。

現在、GFPとその改変蛍光タンパクは生命科学の分野で幅広く活用されています。バゾプレッシンとオキシトシンは古くから知られているホルモンではありますが、こういった新しい技術と出会うことにより、今後その研究に新

たな可能性が開かれることが期待されます。

引用文献

- 1) Kosfeld M et al., Nature 435: 673-676, 2005
- 2) Jin D et al., Nature 446: 41-45, 2007
- 3) Young WS 3rd et al., J Neuroendocrinol 11: 935-939, 1999
- 4) Zhang BJ et al., Endocrinology 143: 1036-1046, 2002
- 5) Ueta Y et al., Endocrinology 146: 406-413, 2005
- 6) Fujio T et al., J Neuroendocrinol 18: 776-785, 2006
- 7) Shibata M et al., J Neuroendocrinol 19: 285-292, 2007
- 8) Suzuki H et al., J Neuroendocrinol 21: 183-190, 2009

● バゾプレッシンニューロンとTRPチャネル～浸透圧・温度感受性～

横山 徹 (産業医科大学医学部第1生理学)

生物は、体内の浸透圧を一定に保つために常に体内の浸透圧をモニターする仕組みを持っており、抗利尿ホルモンとして知られるバゾプレッシンが重要な役割を果たしている。バゾプレッシンは視床下部室傍核および視索上核に局在する大細胞性神経分泌ニューロン（バゾプレッシンニューロン）で産生されるが、この神経活動の興奮には脳弓下器官や終板器官など浸透圧感受性の高い部位からのシナプス入力や血漿浸透圧・循環関連ペプチドであるアンジオテンシンIIなどの液性因子が関与する。浸透圧をどのような仕組みで感知するか長らく不明であった。最近、痛み・温度感受性センサーとして知られるTRPV1のうちカブサイシンに反応しないN-terminal variant TRPV1遺伝子がバゾプレッシンニューロンに発現し、浸透圧・アンジオテンシンIIへの感受性調節やバゾプレッシン産生に関与していることが報告された¹⁾。この報告では、高浸透圧刺激によってニューロンが活性し、バゾプレッシン産生が増加するが、TRPV1ノックアウトマウスではこれらの反応が野生型マウスに比べ鈍化している他、アンジオテンシンIIへの反応も鈍化していることが示されている。また、TRPチャネルは温度センサーとしても知られている²⁾。バゾプレッシンニューロンの温度感受性とTRPV1チャネルについての研究も報告されている³⁾。バゾプレッシンの分泌動態にはバゾプレッシンニューロンへのシナプス入力が大きく関係している。最近、我々は、科研費特定領域「細胞感覚（セルセ

ンサーの分子連関とモーダルシフト)」の助成を得て、ラットおよびマウスを用いて視索上核大細胞性神経分泌ニューロンへのシナプス入力におけるTRPV1の役割について電気生理学的に検討を行っている。その結果、TRPV1が興奮性シナプス入力における浸透圧ならびにアンジオテンシンII感受性に重要な働きをしていることを発見した。浸透圧変化がどのような機序でTRPチャネルを活性化させているか未だ解明されていない。今後は、より生体に近い状態での実験などを通じて、TRPチャネルと浸透圧センシングの関係が明らかにされることが期待される。



引用文献)

- 1) Sharif Naeini R, Witty MF, Seguela P, Bourque CW, 2006. An N-terminal variant of Trpv1 channel is required for osmosensory transduction. Nat Neurosci 9, 93-98.
- 2) Kauer JA & Gibson HE, 2009. Hot flash: TRPV channels in the brain. Trends Neurosci 32, 215-224
- 3) Sharif Naeini R, Ciura S, Bourque CW, 2008. TRPV1 gene required for thermosensory transduction and anticipatory secretion from vasopressin neurons during hyperthermia. Neuron 58, 179-185.

■ 屋久島国際シンポジウム 開催概要

本年10月2日(金)と3日(土)に「神経ペプチドの比較生物学:無脊椎動物からヒトまで」(Phylogenetic aspects of neuropeptides: From invertebrates to human)というテーマで屋久島シンポジウムを屋久島いわさきホテル(鹿児島県熊毛郡屋久島町)にて開催させていただきます。本シンポジウムは、塩田清二(昭和大学医学部)とHubert Vaudry (INSERM U413, University of Rouen)の二人がオーガナイザーとなって企画・運営をいたします。なお本シンポジウムは鹿児島大学医学部の宮田篤郎教授が主催される第9回VIP/PACAP関連ペプチド国際シンポジウム(10月5~8日)のサテライトシンポジウムとして開催いたします。

本シンポジウム開催の趣旨ですが、「肥満、生殖、浸透圧調節など生体のホメオスタシス調節において、無脊椎動物からヒトに至る神経ペプチドの役割を比較生物学的見地から、世界の最先端の研究を行っている国内外の研究者を招き、シンポジウムおよびポスター発表を行う」ということです。海外から6名、国内から11名の著名な招待講演者を招いて講演をしていただく予定です。またポスター演題も用意しておりますのでとくに若手研究者の方にはふ

塩田清二(昭和大学医学部)

るって演題申し込みをしていただきたいと思います。若手研究者のためのトラベルグラントも用意してあります。論文集はAnn NY Acad Sciに出版予定です。

プログラムとしては、10月2日の午後からセッション1: Evolution and Behavior、セッション2: Obesity and Metabolismを行い、夜にはポスターセッションを予定しています。夕食をしながら活発な討議ができれば幸いです。10月3日の午前中にセッション3: Reproduction、4: Osmoregulationを行う予定です。午前中にすべての演題発表を終わり、午後はバスにて屋久島観光を行います。昼食をはさんで白谷雲水峡めぐりなどの島内観光をする予定であります。なお本シンポジウムについての詳細はホームページ(URL: http://www.issjp.com/yakushima_symposium/)を参照いただければ幸いです。

以上ですが、本学会会員の皆様におかれては多数の演題申し込みとご参加の申し込みをお願い申し上げます。

■ 第9回VIP (Vasoactive Intestinal Peptide) / PACAP (Pituitary Adenylate Cyclase -Activating Polypeptide) 関連ペプチド国際シンポジウムへのお誘い

宮田篤郎(鹿児島大学医歯学総合研究科)

VIP/PACAP関連ペプチド国際シンポジウムは、従来のVIP国際シンポジウム(1981年設立)とPACAPシンポジウム(1991年設立)が互いに研究交流を深めるため統合され、第1回がフランスのストラスブルグで開催されて以来2年おきに欧米を中心に交互に開催されてきた。今回の第9回シンポジウムは、第6回の箱根以来2度目の日本開催となる。本シンポジウムは、VIP, PACAPおよび関連するペプチドに関心のある世界各国の研究者が一同に集まり、国際交流を行う場を提供することを目的としている国際会議である。本シンポジウムでは、基礎的研究発表が主体となっているが、これらのペプチドが人体における種々の疾患と関連性のあることも知られてきており、VIPが肺癌や種々

の免疫疾患、またPACAPが統合失調症など神経疾患の治療薬として臨床応用が期待されている。さらに同じファミリーの関連ペプチドであるセクレチンやグルカゴンも包含され、特にglucagon-like peptide (GLP) は、最近国内では新規糖尿病治療薬として注目され、その臨床研究がさかんに進められている。

今回のシンポジウムは、開催年の本年がPACAPの発見20年目となることから、PACAP発見者であるチューレン大学の有村章名誉教授ゆかりの地である鹿児島で開催されることになった次第である。残念ながら故有村名誉教授は、2007年暮れに逝去されたが、生前日本のみならず国際的にも神経内分泌学をはじめ医学研究において多大な学術的貢

献をなされた。従って今回のシンポジウムは「PACAP発見20周年記念」という意義に加え、広く医科学分野における有村先生の功績を偲ぶ意義も有している。また、VIPやPACAPだけでなく、グルカゴンやGLP-1など関連するペプチドの研究発表を広く受け入れることにより、基礎から臨床まで多様な研究に触れ、臨床応用にも結びつく実証的な意見交換を行える包括的な研究交流の場としたい。特に国内外の若手研究者には、トラベルグラントを十分に準備しており、基礎医学から臨床医学までに細分化されたこの研究

領域を横断的に俯瞰できる本シンポジウムが、自らの現在の位置と方向性を熟考するまたとない機会となることを期待する次第である。ご興味のある方は、下記の学会ウェブサイトをご参照いただければ幸いです。

学会ホームページ：

<https://entry2.jtb.ne.jp/mel/web/VIP-PACAP2009/index.html>

■ 第11回国際下垂体病理学会学術総会のご案内

佐野 壽 昭（第11回国際下垂体病理学会学術総会会長・徳島大学医学部人体病理学）

この度、第11回国際下垂体病理学会（IPPS）学術総会を平成21年10月16日（金）～20日（火）の日程で、淡路島国際会議場（夢舞台）にて開催する運びとなりました。

IPPSは、世界各国の下垂体病理学の第一線で活躍している研究者と関連分野の内分泌医、脳外科医、基礎研究者等が3年ごとに集い、新知見の交換と将来の方向・発展を探ることを目的として設立され、1980年、カナダのモントリオールでの第1回を皮切りに、メキシコ、ドイツ、フランス、カナダ、イギリス、日本（箱根）、ギリシャ、ブラジル、イタリアで学術集会を開催してきました。今回は日本として2度目の開催となります。

IPPSへの参加者は、日本、カナダ、アメリカ、メキシコ、ブラジル、フランス、イタリア、イギリス、スウェーデン、オーストラリア等、毎回、海外から40～60名、自国から20～30名と100名弱がほぼ固有のメンバーとなっており、今回も同様と見込まれます。

学術集会におけるテーマは、下垂体疾患の臨床・基礎研究の新知見、下垂体腫瘍への分子病理学的アプローチの応用、下垂体疾患の動物モデル研究などで、教育講演、シンポジウム、一般口演などの形式でプログラムを立案してい

ます。具体的には、16日夕方の歓迎レセプションに始まり、17日と19日は終日の学術セッション、18日は午前中の学術セッションと午後の半日観光ツアー、20日朝に解散としています。

フル参加される方々は同じホテル（今回はWestin Hotel）に宿泊し、食事や自由時間も利用して親交を深めることを本学会の伝統的なモットーとしています。これほど多数の下垂体研究の世界的第一人者が来日し、日本の研究者とじっくり議論と交流を深めることのできる学会は極めて少なく、大変貴重な機会と思われれます。

なお、10月17日（土）は、広く国内の下垂体腫瘍に関心のある基礎・臨床の先生方にも1日だけ参加して頂けるようなプログラムとし、著名な国内外研究者による教育講演、シンポジウムを集約的に行うことにしています。

IPPS学術総会にフル参加を希望される方、あるいは17日のセッションのみに参加を希望される方には事前登録をお願いしております。関心がおありの方は下記までメールでご連絡下さいますようお願い致します。

sano@basic.med.tokushima-u.ac.jp

■ 編集後記

企画広報担当理事 島津 章（国立病院機構京都医療センター臨床研究センター）

今回のNewsletter No.10では、本年9月に開催予定の第36回学術集会および続いて開催される第8回国際下垂体後葉ホルモン会議の予告を掲載いたしました。この会議にちなみ、大磯先生、上田先生の教室の先生方に下垂体後葉に関する基礎的および臨床的なトピックスをいくつかご紹介していただきました。お忙しい中、快諾していただいた諸先生に感謝申し上げます。

本学会の名誉会員である大藤眞先生のご逝去を悼み門下生のお一人である橋本浩三先生に追悼の言葉をお願いいたしました。大藤先生は日本神経内分泌学の黎明期にご活躍され、下垂体門脈の存在と魅力をお示しいただきました。ここに学会員一同、深く感謝申し上げ、ご冥福をお祈りする次第です。

神経内分泌関連では本年度、多くの国際的な集会在目白押しです。第36回国際生理学会大会（京都）に引き続き、2nd School of Neuroendocrinologyが産業医大上田先生のお世話で湯布院で開催されます。さらに第11回国際下垂体病理学会（会長：佐野先生）が淡路島で、第9回VIP/PACAP/関連ペプチドに関する国際シンポジウム（会長：宮田先生）が鹿児島で、そのサテライトシンポジウム（オーガナイザー：塩田先生）が屋久島で開催予定となっております。日本神経内分泌学会の先生方も是非ご参加いただき、国際的交流を深めていただければ幸いに存じます。



■ 事務局からのお願い

川上賞、特別功労賞、若手研究助成金の応募・推薦・申請等の締め切りが変更されました。いずれも締め切りは該当年の1月末日ですのでご注意ください。

関係書式はホームページ (<http://www.nacos.com/jns/>) からダウンロードのうえ作成し、事務局宛お送り下さい。

事務局からの連絡は、業務効率化のため極力電子メールを用いるようにしております。電子メールアドレスをお届けでない先生は、事務局までメールでご連絡下さい。また、ご自宅や勤務先の住所変更の際には必ずお届出をお願いいたします。ただし、日本神経内分泌学会は日本内分泌学会と共通のデータベースを使用しておりますので、内分泌学会にお届け済の方に関しましては連絡は不要です。

年会費は年度始めに送付いたします振込用紙にてお支払いいただくようお願いしておりますが、紛失された際は事務局までご請求いただくか、下記の口座にゆうちょ銀行に備え付けの振込用紙にて通信欄に会員番号・年度を明記の上、お振込み下さい。

口座番号: 01030-7-18042

加入者名: 日本神経内分泌学会

ニホンシンケイナイブンプイガッカイ

未納分の会費額がご不明の方は、お問い合わせ下さい。

また、会員番号は本会からお送りいたします郵便物に貼り付けております宛名ラベルに記載しております。お忘れになった方は、そちらを見ていただくか、事務局にお問い合わせいただきますようお願いいたします。日本内分泌学会の会員の

方は、日本内分泌学会の会員の会員番号が分科会の会員番号となります。

今後とも宜しく願い申し上げます。

日本神経内分泌学会事務局

〒604-8111 京都市中京区三条通柳馬場西入ル榎屋町75番地

日本生命京都三条ビル3階

(社) 日本内分泌学会内 日本神経内分泌学会

Phone : 075-229-8252 Fax : 075-229-8251 E-mail : jnes@wine.ocn.ne.jp

担当：小南 悟郎、伊佐 潤子（担当者変更）

《住所の英語表記》

The 3rd Floor, Nihon Seimei Kyoto Sanjo Building

75 Masuya-cho

Sanjo Yanaginobamba-nishiiru, Nakagyo-ku,

Kyoto 604-8111 JAPAN

■ 名誉会員リスト ■

新井康允	井端泰彦	井村裕夫	入江 實	加藤順三
熊谷 朗	齊藤壽一	佐野 豊	鎮目和夫	高原二郎
出村 博	廣重 力	松尾壽之	松倉 茂	山下 博
吉田 尚				

(以上16名)

■ 功勞評議員リスト ■

石井 淳	石居 進	井上修二	沖 充	加藤 讓
貴邑 富久子	久保勝知	佐々木 英夫	鈴木光雄	高橋 迪雄
谷口 洋	中井康光	中井義勝	中林 肇	橋本 浩三
藤田 恒夫	牧野恒久	牧野 英一	本松 利治	森下 一
森本 靖彦	柳瀬 昌弘	山路 徹	吉見 輝也	

(以上24名)

■ 役員リスト ■

須田 俊宏	(理事長)	弘前大学大学院医学研究科内分泌代謝内科学
芝崎 保	(庶務)	日本医科大学大学院医学研究科生体統御科学
森 昌朋	(庶務)	群馬大学大学院医学系研究科病態制御内科学
岩崎 泰正	(庶務)	高知大学保健管理センター
井樋 慶一	(庶務)	東北大学大学院情報科学研究科情報生物学分野

千原和夫	(会計)	兵庫県立加古川病院
大磯ユタカ	(会計)	名古屋大学大学院医学研究科糖尿病・内分泌内科学
中里雅光	(会計)	宮崎大学医学部内科学講座神経呼吸内分泌代謝学
島津章	(企画広報)	国立病院機構京都医療センター臨床研究センター
井上金治	(企画広報)	埼玉大学大学院理工学研究科生命科学
河田光博	(企画広報)	京都府立医科大学大学院医学研究科生体構造科学部門
中尾一和	(企画広報)	京都大学大学院医学研究科内科学内分泌代謝内科
寒川賢治	(学術賞)	国立循環器病センター研究所
上田陽一	(学術賞)	産業医科大学医学部第一生理学
佐久間康夫	(学術賞)	日本医科大学大学院医学研究科システム生理学分野
加藤幸雄	(学術賞)	明治大学農学部生命科学科遺伝情報制御学
有田順	(監事)	山梨大学大学院医学工学総合研究部第一生理
屋代隆	(監事)	自治医科大学解剖学講座組織学部門

(以上18名)

■ 再任評議員 (任期：2008.8.29～2012総会日) ■

相澤 徹	阿部 廣 巳	和 泉 俊一郎	岩 下 光 利	太 田 耕 造
加 治 秀 介	片 上 秀 喜	加 藤 進 昌	島 津 章	末 丸 修 三
高 野 幸 路	高 橋 裕	伊 達 紫	田 村 秀 樹	塚 田 俊 彦
新 見 道 夫	西 塚 雅 子	本 間 さ と	牧 野 晋 也	美津島 大
由 利 和 也				

(以上21名)

■ 2008年度 新入会員 ■

石 田 卓 也	東北大学 大学院 情報科学研究科 情報生物学分野
井 田 隆 徳	久留米大学 分子生命科学研究所 遺伝情報研究部門
伊 藤 聡	町田市民病院 内科
大 月 道 夫	大阪大学 大学院医学系研究科 内分泌・代謝内科
大 坪 広 樹	産業医科大学 第1生理学教室
大 淵 豊 明	産業医科大学 第1生理学
菅 野 康 太	東京大学 大学院総合文化研究所 広域科学専攻 生命環境科学系 石浦研究室
金 高 友 里	共立女子大学
小 山 麻希子	神奈川県立足柄上病院 産婦人科
芝 原 優 美	神戸大学 医学部 保健学科
清 水 裕 史	名古屋大学 医学部附属病院 糖尿病内分泌内科
杉 山 裕 香	神戸大学 医学部 保健学科

谷 本 啓 爾	大阪医科大学 第一内科
田 端 秀 美	日本獣医生命科学大学 大学院 獣医生命科学研究科
轟 美和子	産業医科大学 産業生体科学研究所 精神保健学教室
仲 田 瑛 子	共立女子大学 家政学研究科
姫 野 亜紀裕	京都医療センター 糖尿病センター
廣 井 麻依子	名古屋大学 医学部附属病院 糖尿病・内分泌内科
松 本 良 平	日本医科大学 解剖学
丸 山 崇	産業医科大学 第1生理学
横 川 健	東北大学 大学院 情報科学研究科
横 山 徹	産業医科大学 第一生理
吉 田 さちね	理化学研究所 脳科学総合研究センター
米 川 忠 人	宮崎大学 医学部附属病院 内科学講座 神経呼吸内分泌代謝学分野
渡 邊 暁 博	北海道医療大学 心理科学部

(以上25名)

■ 賛 助 会 員 ■

味の素株式会社	〒104-8315	東京都中央区京橋1-15-1
株式会社エスアールエル	〒320-0851	宇都宮市鶴田町1557-1 栃音第二ビル2F
科研製薬株式会社	〒113-8650	東京都文京区本駒込2-28-8 文京グリーンコート内
キッセイ薬品工業株式会社	〒103-0022	東京都中央区日本橋室町1-8-9
塩野義製薬株式会社	〒561-0825	大阪府豊中市二葉町3-1-1
帝人ファーマ株式会社	〒100-8585	東京都千代田区内幸町2-1-1
日本イーライリリー株式会社	〒107-0062	東京都港区南青山1-1-1 新青山ビル西館21F
ノバルティスファーマ株式会社	〒106-8618	東京都港区西麻布4-17-30
ノボノルディスクファーマ株式会社	〒103-8575	東京都中央区日本橋大伝馬町5-7
ファイザー株式会社	〒151-8589	東京都渋谷区代々木3-22-7 新宿文化クイントビル
株式会社三菱化学ヤトロン	〒162-0812	東京都新宿区西五軒町13-1

(以上11社)

社団法人日本内分泌学会 分科会
日本神経内分泌学会 定款

施行	昭和56年 6月 5日
一部改正	昭和59年11月 3日
〃	平成 2年10月31日
〃	平成 6年12月 3日
〃	平成 9年11月 8日
〃	平成11年10月29日
〃	平成14年10月11日
〃	平成15年 9月11日
〃	平成16年10月 9日
〃	平成17年 7月 8日
〃	平成18年10月27日
〃	平成19年 8月 4日

- 第1条 本会は日本神経内分泌学会(Japan Neuroendocrine Society)と称する。
- 第2条 本会の事務局は理事会の指定する場所におく。
- (目的)
- 第3条 本会は神経内分泌学の進歩・向上をはかることを目的とする。
- (事業)
- 第4条 本会は次の事業を行なう。
1. 学術集会の開催
 2. 国際交流の促進
 3. 国際的研究者の育成
 4. その他、本会の目的達成に必要な事項
- (会員)
- 第5条 本会の会員を次のように分ける。
1. 一般会員
 2. 名誉会員
 3. 賛助会員
- 第6条 一般会員は本会の目的に賛同し、所定の年会費を納入した者で、その年度の学術講演会での講演発表の権利を有する。また3年連続して会費を納入しなかった者は会員の権利を失う。
- 第7条 2. 一般会員が退会を希望するときは、理由を付して退会届を理事長に提出しなければならない。
- 第7条 名誉会員は本会の目的に関し特に功績のあった者で理事会が推薦し、評議員会の承認を得て決定し、総会に報告する。
- 第8条 2. 名誉会員は一般会員と同等の資格および権利を有するが会費は免除される。
- 第9条 賛助会員は本会の目的に賛同し、賛助会費を納入した個人または団体である。
- 第10条 一般会員および賛助会員の会費は理事会で立案し、評議員会と総会の承認を得る。
- (役員)
- 第10条 本会に次の役員を置く。
1. 理事 若干名(うち理事長 1名)
 2. 監事 2名
- (役員を選任)
- 第11条 理事は評議員の投票または理事長の推薦により評議員会および総会の承認を得て選任する。理事長の推薦による理事は原則3名とするが、必要に応じ若干名を追加することができる。
2. 理事は互選で理事長を定める。
 3. 監事は理事長が推薦し、評議員会および総会の承認を得るものとする。
- (理事の職務)
- 第12条 理事長は、本会を代表し会務を統轄する。
2. 理事長に事故があるとき、又は理事長が欠けたときは、あらかじめ理事長が指名した順序により、理事がその職務を代理し、又はその職務を行う。
 3. 理事は理事会を組織して、この定款に定めるもののほか、本会の総会の権限に属する事項以外の事項を議決し、執行する。
 4. 理事は理事長の業務を補佐する。
 5. 理事長は必要に応じ、本会の運営に必要な研究賞選考委員会などの諸種委員会の設置および委員の委嘱を行なうことができる。
- (監事の職務)
- 第13条 監事は本会の業務および財産を監査する。
2. 監事は理事会に出席する。
- (役員任期)
- 第14条 理事長の任期は4年とする。
2. 理事の任期は2年とする。評議員の投票または理事長の推薦により再選された場合には再任を妨げない。
 3. 監事の任期は2年とする。連続する場合は1期に限り再任できる。
 4. 役員任期は学術集会時の総会の日からはじまり、それぞれ定められた任期を経た後の学術集会時の総会の日をもって終了する。
 5. 役員は65歳の誕生日を迎えた後は、現在の任期を終了した後、更に再任されることはない。

(理事会)

第15条 理事会は理事長が召集する。

2. 理事会の議長は理事長とする。

第16条 理事会は理事の現在数の3分の2以上の者が出席しなければ、議事を開き議決することは出来ない。ただし、当該議事につきあらかじめ書面をもって意志表示した者および他の理事を代理人として表決を委任した者は、出席者としてみなす。

2. 理事会の決定は出席者の過半数による。可否同数の時は、理事長が決する。

3. 理事長は出席が必要と認めた者を、オブザーバーとして理事会に出席させることができる。

(評議員、功労評議員の選出および任期)

第17条 評議員は評議員2名以上の推薦に基づき、理事長が理事会に諮り、評議員会の議を経て定め、学術集会時の総会の承認を得るものとする。

2. 評議員の任期は4年とし、再任を妨げない。ただし、再任は理事会において審議し、評議員会および総会の承認を得るものとする。

3. 評議員は4年の任期を満了しない場合でも、65歳の誕生日を迎えた後の学術集会時の総会の日をもって任期を終了する。

4. 功労評議員は、第17条3項により任期を終了した評議員で、議員歴10年以上の経歴を有し本会に功労のあった者の中から、理事会の議決を経て推薦される。

(評議員、功労評議員の職務、権利)

第18条 評議員は評議員会を組織して、理事長および理事会の諮問事項、その他本会の運営に関する事項を審議する。

2. 功労評議員は、評議員会に出席できるが、評議員会の表決に加わることができない。理事長は、必要があると認めた時は、功労評議員に対し意見を求めることができる。功労評議員は本会会費を免除される。

(評議員会)

第19条 評議員会は年1回、学術集会時の総会に先立って、理事長が召集する。

2. 評議員会の議長は、出席議員の互選により定める。

第20条 評議員会は、評議員現在数の3分の2以上の者が出席しなければ、議事を開き議決することができない。ただし、当該議事につきあらかじめ書面をもって意志表示したものおよび他の評議員を代理人として表決を委任した者は、出席者としてみなす。

2. 評議員会の決定は出席評議員の過半数による。可否同数のときは、議長が決する。

(総会)

第21条 総会は会員をもって組織する。

第22条 総会は学術集会時を含めて少なくとも年1回、理事長が召集し開催する。

2. 臨時総会は、理事会が必要と認めたとき、理事長が召集する。

第23条 総会の議長は出席会員の互選により定める。

第24条 総会は理事会と評議員会における審議事項を議決する。

第25条 総会は会員現在数の3分の1以上の者が出席しなければ、議事を開き議決することができない。ただし、当該議事につきあらかじめ書面をもって意志表示したものおよび他の会員を代理人として表決を委任した者は、出席者としてみなす。

2. 総会の決定は出席会員の過半数による。可否同数のときは、議長が決する。

(会長)

第26条 会長はその年度の学術集会に関わる任務を遂行すると同時に、日本内分泌学会との十分な連絡を図るため、日本内分泌学会理事会にオブザーバーとして出席する。

第27条 会長は理事会において推薦し、評議員会および総会の承認を得て決定する。

第28条 会長の任期は1年とし、前回学術集会の終了翌日から学術集会終了の日までとする。

(学術集会)

第29条 学術集会は毎年1回、秋に開催する。またその内容は本会として特色あるものとする。

第30条 学術集会に発表する者は、会員であることを必要とする。ただし、本会の主旨に賛同する非会員で会長が承認した場合には発表を行なうことができる。

(表彰)

第31条 神経内分泌学の領域において優れた業績をあげた研究者に対し、別に定める規程に基づき、研究賞を授与する。また、基礎的研究の発展を推進するために若手研究助成金制度を設け、別に定める規程に基づき助成を行う。

2. 本会の目的の達成または事業の遂行に関し特段の功績のあった者に対し、別に定める規程に基づき、特別功労賞を授与する。

(国際神経内分泌連盟)

第32条 本会はInternational Neuroendocrine Federation (国際神経内分泌連盟)に加盟し、年会費を負担する。

(会計)

第33条 本会の運営には次の資金をあてる。

1. 会費

2. 寄付金

3. 資産から生ずる収入

4. その他の収入

2. 年度会計の報告は監事の監査を経た後、理事会、評議員会並びに総会にはかり承認を得る。

3. 会計年度は毎年4月1日に始まり、翌年3月31日に終わる。

(会則の変更など)

第34条 本会則の変更および細則の作成には理事会および評議員会の議を経て総会の承認を得る。

(附則)

第35条 本会則は平成11年10月29日より施行する。

日本神経内分泌学会 定款施行細則

施行 平成12年10月13日
一部改正 平成14年10月11日

(役員)

- 第1条 定款第11条に定める評議員による理事選出は、理事長が委嘱した選挙管理委員会の管理下に郵便により行なう。
2. 選挙の結果、得票数が同数となった場合は会員歴の長い者を選任するものとする。
- 第2条 選挙により理事に選任された者が任期の途中で辞任したときは、投票で次点となった者を繰り上げて、評議員および総会で承認を得て理事に選任する。
この場合の任期は前任者の残任期間とする。

(会務の担当)

- 第3条 理事長は理事から庶務担当、会計担当、学術賞選考担当および企画・広報担当の理事それぞれ複数名を任命する。
- 第4条 理事長は日本神経内分泌学会の代表者として International Neuroendocrine Federation (国際神経内分泌連盟) の council member を兼任する。但し、Executive Committee Member に選ばれた場合には、その任期(4年)が終了するまで新理事長代理として Executive Committee に出席する。
- 第5条 庶務担当理事は次の事項を担当する。
- (1) 会員に関する事項
入会、退会、会員の認定
 - (2) 評議員に関する事項
評議員の選出に関する手続き、評議員会の議案と記録
 - (3) 理事会に関する事項
理事会の議案と記録
理事の選出に関する手続き
 - (4) 記録の保管と雑誌への掲載
 - (5) 外部との折衝に関する事項
 - (6) 学術集会に関する事項
 - (7) その他、庶務に関する事項
- 第6条 会計担当理事は次の事項を担当する。
- (1) 現金の出納および保管
 - (2) 会費の請求および収納
 - (3) 予算および決算に関する事項
 - (4) 会計帳簿および証書類の整理および保管
 - (5) その他、会計資産に関する事項
- 第7条 学術賞担当理事は次の事項を担当する。
- (1) 学術賞の受賞候補者を選出し、理事会に答申する。
- 第8条 企画・広報担当理事は次の事項を担当する。
- (1) 学会の運営と事業の企画・立案に関する事項
 - (2) 学会の運営と事業について学会員および関係する各方面への広報活動

(年次学術集会)

- 第9条 年次学術集会は、第 回日本神経内分泌学会学術集会と呼称する。
- 第10条 年次学術集会の会期は原則として2日とする。
- 第11条 年次学術集会における講演抄録は、日本内分泌学会雑誌に掲載し会員に配布する。
- 第12条 年次学術集会の経費は、本会の学術集会費などをもって充てる。会長は収支決算書を作成し、理事長に報告する。

(細則の変更など)

- 第13条 会則及び細則施行に関し必要な規定は、理事会の議を経てその都度別にこれを定める。
- 第14条 本細則を改正するためには、理事会、評議員会及び総会の議決を経なければならない。
- 第15条 本細則は、平成12年10月13日より適用する。

ヒト成長ホルモン（遺伝子組換え）製剤

薬価基準収載

ナルディトロピン® ナルディフレックス®注 5mg・10mg・15mg

Norditropin® Nordiflex®

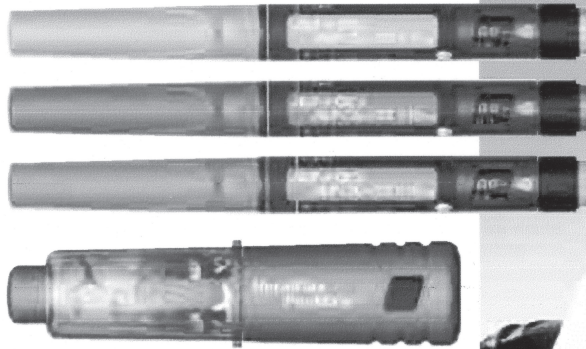
一般名：ソマトロピン（遺伝子組換え）

処方せん医薬品 注意—医師等の処方せんにより使用すること

【禁忌（次の患者には投与しないこと）】

- (1) 糖尿病患者〔成長ホルモンが抗インスリン様作用を有するため。〕
- (2) 悪性腫瘍のある患者〔成長ホルモンが細胞増殖作用を有するため。〕
- (3) 妊婦又は妊娠している可能性のある婦人〔「6.妊婦、産婦、授乳婦等への投与」の項参照〕

「効能・効果」、「用法・用量」、「使用上の注意」、「効能・効果に関連する使用上の注意」、「用法・用量に関連する使用上の注意」等の詳細については中面D1をご参照下さい。



ペン型注射器専用穿刺補助具
ナルディフレックス ペンメイト



2009年4月作成



norditropin®
nordiflex®

薬価基準収載



しっかり守って、きれいに治す。

胃炎・胃潰瘍治療剤

指定医薬品

ムコスタ® 錠100 顆粒20%

Mucosta®

レバミピド製剤

製造販売元
大塚製薬株式会社
Otsuka 東京都千代田区神田司町2-9

資料請求先
大塚製薬株式会社
信頼性保証本部 医薬情報センター
〒108-8242 東京都港区港南2-16-4
品川グランドセントラルタワー 13F

【禁忌（次の患者には投与しないこと）】

本剤の成分に対し過敏症の既往歴のある患者

【効能・効果】及び【用法・用量】

【効能・効果】	【用法・用量】
胃潰瘍	通常、成人には1回レバミピドとして100mg（ムコスタ錠100：1錠、ムコスタ顆粒20%：0.5g）を1日3回、朝、夕及び就寝前に経口投与する。
下記疾患の胃粘膜病変（びらん、出血、発赤、浮腫）の改善 急性胃炎、慢性胃炎の急性増悪期	通常、成人には1回レバミピドとして100mg（ムコスタ錠100：1錠、ムコスタ顆粒20%：0.5g）を1日3回経口投与する。

【使用上の注意】—抜粋—

副作用

調査症例10,047例中54例（0.54%）に臨床検査値の異常を含む副作用が認められている。このうち65歳以上の高齢者3,035例では18例（0.59%）に副作用がみられた。副作用発現率、副作用の種類においても高齢者と非高齢者と差は認められなかった。（ムコスタ錠100の承認時及び再審査終了時）

以下の副作用には別途市販後に報告された自発報告を含む。

重大な副作用

1. ショック、アナフィラキシー様症状（頻度不明*）：ショック、アナフィラキシー様症状があらわれることがあるので、観察を十分に行い、異常が認められた場合には投与を中止し、適切な処置を行うこと。
2. 白血球減少（0.1%未満）、血小板減少（頻度不明*）：白血球減少、血小板減少があらわれることがあるので、観察を十分に行い、異常が認められた場合には投与を中止し、適切な処置を行うこと。
3. 肝機能障害（0.1%未満）、黄疸（頻度不明*）：AST（GOT）、ALT（GPT）、γ-GTP、ALPの上昇等を伴う肝機能障害、黄疸があらわれることがあるので、観察を十分に行い、異常が認められた場合には投与を中止し、適切な処置を行うこと。

*：自発報告において認められた副作用のため頻度不明。

◇その他の使用上の注意等は、製品添付文書をご参照ください。

（'07.10作成）

HMG-CoA還元酵素阻害剤

薬価基準収載

クレストール錠 2.5mg / 5mg

ロスバスタチンカルシウム錠

指定医薬品・処方せん医薬品^{注)}

注) 注意—医師等の処方せんにより使用すること ④: アストラゼネカグループであるIPR社の登録商標です。



CRESTOR®

● 効能・効果、用法・用量、禁忌、原則禁忌

を含む使用上の注意等につきましては
製品添付文書をご参照ください。

製造販売元(資料請求先)

アストラゼネカ株式会社

〒531-0076 大阪市北区大淀中1丁目1番88号

☎0120-189-115 (問い合わせフリーダイヤル
メディカルインフォメーションセンター)



発売(資料請求先)

シオノギ製薬

大阪市中央区道修町3-1-8 〒541-0045

☎0120-956-734 (問い合わせフリーコール
シオノギ医薬情報センター)

2007年12月作成

NOVARTIS
ONCOLOGY



効能又は効果、用法及び用量、禁忌を含む使用上の注意等については、製品添付文書をご覧ください。



持続性ソマトスタチンアナログ マイクロスフェア型徐放性製剤

薬価基準収載

10mg
20mg
30mg

サンドスタチン® LAR® 筋注用

劇薬 指定医薬品 処方せん医薬品

注意—医師等の処方せんにより使用すること

Sandostatin® LAR®

酢酸オクトレオチド徐放性製剤

製造販売

(資料請求先)

ノバルティス ファーマ株式会社

東京都港区西麻布4-17-30 〒106-8618

NOVARTIS DIRECT

☎0120-003-293

受付時間 月-金 9:00-18:00
www.novartis.co.jp